

2016年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

2016年1月10日	「神の護り」
2016年1月24日	「讃美と祈りの導きの書、詩篇」
2016年1月31日	「小さき者の中に宿り給う神」
2016年2月7日	「全托投身の祈り」
2016年2月14日	「一如一体」
2016年2月21日	「外なる人は壊るれども」
2016年2月28日	「『永遠の生命』に生きる」
2016年3月6日	「火の中、水の中を往くときも」
2016年3月13日	「神の護りと導き」
2016年3月20日	「生命への道」
2016年4月3日	「永遠の生命」を生きる (続)
2016年4月10日	「無為自然」
2016年4月24日	「たとえ地は震うとも」
2016年5月1日	「熾んなる大生命の福音」
2016年5月8日	「キリストの御霊に在りて生きる」
2016年5月22日	「此の火すでに燃えたらんには」
2016年5月29日	「モーセへの語りかけと御旨の成就」
2016年6月5日	「旅路における神の護りと導き」
2016年6月19日	「十戒の授与」
2016年6月26日	「執り成しの人モーセ」
2016年7月3日	「キリストの福音」対「モーセの律法」
2016年7月31日	「十字架体受」
2016年7月24日	「直ちに」の福音書 マルコ伝
2016年8月7日	「現在」を「終末」として生きる
2016年8月21日	「祈りて待ち望む」
2016年9月11日	「天国人」
2016年9月18日	「光と闇」
2016年9月25日	「此の火すでに燃えたらんには」
2016年10月2日	「人生と京都キリスト召団への応援歌」
2016年10月16日	「我にとりて、生くるはキリストなり」
2016年10月23日	「聖書は人生の応援歌」
2016年11月6日	「無力に徹する」
2016年11月13日	「霊」の生命を生きる
2016年11月20日	「天の次元の祝福」
2016年11月27日	「我らは生命の御言の伝達者」
2016年12月4日	「降誕節を前にして」
2016年12月18日	「光」



神の護り

2016年1月10日

聖書朗読 詩篇46篇

年頭にあたり、奥田先生は、2016年の信仰の課題として「神の護り」を掲げられました。日本人は、伝統的に正月に社寺に初詣をして無病息災を祈願します。クリスマスは、初詣こそしませんが、キリストに対して一年の護りを祈願します。そして、聖書には、力強い「神の護り」の約束があります。イザヤ書43章1節から3節、46章3、4節、49章10節、詩篇23篇、46篇、91篇、103篇3節から5節、ヨハネ福音書15章7節、ヨハネ第一の手紙5章14、15節、18節などの聖句をしつかりと受け取り、「神の護り」を実感してこの一年を力強く歩みたいと願っています。

「神の護り」とは、人間の側の願望を叶えていただくという単なる御利益に預かることではありません。もちろん、キリストには絶大な力がありますから、あらゆることをお祈りすることが出来ます。

「あなたが私に繋がっており、私の言葉があなたの方の内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」（ヨハネ福音書15章

7節）

という角度からの真剣な祈りは、必ず聴かれます。しかし、信仰が、この世の見える世界で実現されないなら信じないという次元に留まるのなら、それは御利益信仰と同じです。

キリストご自身を受け取るということは、目に見える現実を超えた奥にある世界を受け取ることです。聖書は、決してこの地上で命を守ることを約束しているものではありません。神様の守りの約束があるにもかかわらず、地上で果たされないことや、祈ったにもかかわらず癒されないことも起こります。しかし、神様には、神の国において、それらを超えた本当の約束を成就されるというご計画があります。身は滅ぼされても魂は守られています。自然の命が失われても、霊なる命は翼を与えられて天国で守られています。私たちの願いをはるかに超えて、天上では祈りは成就しているのです。聖書は、見えるところの奥で成っている事態を全面的に受け取っていくという絶対肯定の世界です。



讃美と祈りの導きの書、詩篇

2016年1月24日

聖書朗読 詩篇116篇

この冬一番の寒波のため、厳しい寒さの日だったが、今日も主にある兄弟姉妹が相集い、祈りの集会が持たれた。我らの集会場は程良く暖房がきいていて心地良い。

今日の講筵は、詩篇の中から、私たちの魂を励ます御言みことばを学んだ。奥田先生は、詩篇について、その魂を込めた叫び、祈りに励まされ共感させられるし、何よりも、讃美と祈りを引き出してくれる書であると話された。

詩篇の祈りは、艱難なやみや憂いからの救いを祈るもの、神の護りを感じ謝するもの、義ただしい審判さばきを求めるものなど様々である。いずれも日々の生活の中から生じた、祈らないではいられない叫びである。その必死な祈りの姿が、時を越えて現代に生きる私達の魂にも響き、親しみを覚えさせるものと思われる。大いなる主の御前に一個の人間が立つとき、その存在の小ささ、力の弱さなどから来る魂の渇き、呻うめきは、昔も今も変わらずに詩うたとなって流れ出る。

今日取り上げた詩篇の箇所は、116篇の他、138篇、94篇(17〜19)、119篇(28、49〜52、54、55、57〜64、65〜72、73〜77、81、92〜94、103、105、114、116、130、165〜168、169〜175)であった。テモテ後書2章11〜13節の

「我らは真実ならずとも、彼は絶えず真実にましませり」

も注目。印象に残った先生の言葉は次のとおり。

- ① 主キリストは、私達の日々を護り導き給う。マイナスと見えることがあっても落胆してはいけない。主はそれ以上の事を備え、慮おぼつてくださる。絶対の護りがある。
- ② 小池辰雄先生は、御言を読んで力が来ないようでは読んだことにはならないと言われた。主は私達を御言で導いてくださり、お前を活かすと言われる。

「わが汝らに語りし言は、霊なり、生命いのちなり」(ヨハネ伝6章63節)のとおりの。

- ③ 「主は、われに係れることを全うし給わん」(詩篇138篇8節)

主キリストは、依り頼む者に路を示し、使命を授け、根底から支え給う。主に全托し、

「主よ、日々、私を導いてください」

と、主と対話するつもりで詩篇を読み、祈っていきましょう。



小さき者の中に宿り給う神

——I兄 満23歳誕生日感謝会——

2016年1月31日

聖書朗読 詩篇8篇

「なんじは おさなご 嬰兒 あだひと ちのみごの口により 力の基 もとをおきて 敵にそなへたまへり。こは仇人 あだひとと うらみを報ゆるものを 鎮静 おしじつめんがためなり」(詩篇8篇 2節)

主様は、小さい幼な児の中にこそ宿り、力の基をおき賜うておられるように、イエス様そのものが幼な児で在りました。

K兄は、
「ドゥーイング (為す) クリスチャンではなくて、ビーイング (在る) クリスチャンであれ」

を天童として体现され、訪ねてくださっている人を逆に励まし、力付け、勇気付けておられます。

パウロ奥田昌道先生とテモテK兄の麗しいキリストの中に遊んでいるイザヤ書11章のドラマを観音させていただきました。

テモテの由来は、I兄が、いつも「手を持って」と仰るところより来る名前です。
午後から、

「ちひさき わらべ 童子にみちびかれ」(イザヤ書11章6節)

るキリスト召団の御婦人たちにより供えられた昼食愛餐会にて、炊き込み御飯と御味噌汁と手造りクッキーをいただき、至福の時を過ごしました。

【付記】この日は、ちょうどI君の満23歳の誕生日でした。1993年の誕生から今日に至るまで、ときには重篤な病気による危機を幾度か乗り越えて、元気にこの日を迎えることが出来たのは、ひとえに主キリストの御恵みと御護りのほか、多くの方々の祈りと助けに支えられたことによります。S君と同じく、K君も京都キリスト召団と共に生きてきました。その感謝を表したかったのです。(奥田昌道)



全托投身の祈り

2016年2月7日

聖書朗読 ヨハネ伝15章1～17節

奥田先生は、常々、

「ヨハネ伝は私の心の故郷である」

と話され、折に触れてヨハネ伝に目を留められる。今日、学んだヨハネ伝15章は、主キリスト御自身が語られた言葉であり、重みがあり内容も深い。ヨハネ伝15章につき先生は次のように言われた。

「十字架のあがないを既にいただいた私たちは、『主様、あなたの御約束は私において全部成就しています、有難うございます』と大胆に受け取って良いのです」

と。先生は、御言を、御自身の生活に引き付けて読み、大胆に受け取っていかれる。以下にその様子を記す。

① 主キリスト（葡萄樹）に連なり一体とされた者（枝）よ、汝らは豊かな果を結び、主の香りを漂わす存在となる。主の聖霊が、それを為してくださいから、どこまでも平伏しの心でありなさい。

② 神の御業は、人を通して実現される。キリストは私たちと一つになり、聖霊を注ぎ込み、豊かな果を結ばせる。どんな状況にあっても、主の護りがあることを信受し、いつ倒れても「アーメン・ハレルヤ！」でありたい。私たちは、この世の生命以上のものをいただきたいのですから。

③ 主を愛するとは、御言を守ること、御意を大切にすること。

④ 主にゆだねていけば、豊かなものをくださる。皆さんも、「ヨハネ伝15章は私において既に成就しています。」と、大胆に言えるようになってください。

あらためて「御霊の果」を思う。

「聖霊の果は、愛、喜悅、平安、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制なり。」（ガラテヤ書5章22節）

【付記】「ユーストリームを視聴されている方へ」（お詫びを兼ねて）

2月7日の聖日集会の様子を皆様に送信することが出来ませんでした。お詫び致します。目下、調査中ですが、最近、ユーストリームの無料配信サービスが廃止されている模様であり、ライブ動画配信そのものが出来なくなっているようです。有料配信の可否を含め、次回に、調査結果をお知らせ致します。



一如一体

2016年2月14日

聖書朗読 ヨハネ福音書17章1～11節

今日の講筵は、ヨハネによる福音書を通してキリストと「一如一体」となることの深い意味を語られました。

イエス様を通して見えない神様が人々に現れましたように、神様の御業は、現象によることは少なく、多くは人を通して現われます。私たちも、クリスチャンであるならば、

「私とキリストは一つ。私を見たものは、キリストを見た」

と告白できるような生き方をして、キリストの存在を世の人々に示していく必要があります。ただ単に、知識の世界でキリストを知るだけでは、そのような生き方はできません。私たちの存在そのものが、キリストと「一如一体」になるときに、初めてこの告白をすることができるようになります。「一如一体」の次元を告白できるまでは、本物のクリスチャンとは言えません。

もつとも、生まれながら神に敵対する人間は、自らでは「一如一体」の次元に到達することはできません。しかし、キリストは、人間のこの性を十字架で一身に引き受けてくださり、私たちがキリストと一体となり、永遠の命をいただくことのできる道を開いてくださいました。私たちは、このキリストの十字架の奥義を体受して、地上という様々な苦難、悩みなどの制約のある世界にありながらも、それを突き抜けた永遠の世界と繋がるような生き方をして神の栄光を現す存在になる使命があります。私たちは、既に永遠の命をいただいてキリストの大きな手の中にありますから、何も心配することはありません。見えるところは、どのような事態であっても、その奥にあるキリストの絶対の護りを信じて委ねてゆけば、根源的などころにおいて、全ては解決されてゆきます。私たちの願いは、思いを超えて御霊の願いとなって成就してゆきます。一人一人に負わされた十字架をキリストと共に背負い、目に見えないもの、永遠なものを信じ抜き、キリストの永遠性を証言していくことが使命であります。ヨハネ伝は、永遠の命に至る道を示していますので、熟読身読してください。

N兄が来週手術をされます。御加禱をお願いします。



外なる人は壊るれども

2016年2月21日

聖書朗読 コリント後書4章(全)

「この故に我らは氣落ちせず、我らが外なる人は やぶ壊るれども、内なる人は日々 あらたに新なり」(コリント後書4章16節)

どうしてこんなことが……、と途方にくれるようなことが起きても、絶望して投げ出したりはしません。なにが来ても、微笑んで乗り越える姿が美しいことを召団で学んでいるからです。

サタンが支配しているこの世では、現象的に私たちは四方八方から苦しめられ圧迫されますが、九転十起です。打ち倒されても、また立ち上がって、前進を続けます。

なぜなら、主様は、決してお見捨てにならない方だからです。

私たちは、主に仕えているために、絶えず死の危険にさらされています。しかし、そのことでかえって、私たちの死ぬべき体によって、イエス・キリスト様の力を明らかに示す機会が、常に与えられています。私たちは、イエス・キリスト様を宣べ伝えているために、死に直面しています。しかし、その結果、永遠のいのちが与えられます。

今の私たちの苦しみや悩みは、結局のところ、取るに足りないものであり、それほど長く続きません。しかし、このつかの間の苦しみは、逆説的に、永遠に尽きないあふれるばかりの祝福をもたらします。ですから、身の回りの苦しみには、目を留めません。

天にある喜びを望み見て、御言葉の行者として生きていきましよう。



『永遠の生命』に生きる

2016年2月28日

聖書朗読 コリント後書5章1～19節

4年前の今日（2月28日）、私たちの「集会の母」O姉を天に送った。今日の集会のはじめに奥田先生は、

「Y奥様がI君とともに、今も天界で主のために働き、『永遠の生命』の中に生きている」

と話された。

「永遠の生命は主キリストご自身であり、それと同質の霊的生命を分与されていた存在が肉体の死を迎えた時に、霊体と霊衣と霊翼を頂いて天界の主の御許へと引き寄せられ、永遠に主と共に、また先に召された者と共に、御旨に適って働く。今、地上にいる私たちも、日々、永遠の生命を内に頂いて生きることが大事だ」

と述べられた。

講筵では、コリント後書5章の

「主イエスが凡ての人に代わって死んでくださった以上は、凡ての人が既に死んだのだ。だから、生きる者が最早自分のために生きるのではなく、自分に代わり死んで甦ってくださった方、栄光の霊体となって顕現してくださった

その方のために生きる」（コリント後5・4～15）

生き方をすべきこと、その消息はローマ書8章に高らかに謳われていることが語られた。また、ヨハネ伝11章では、主イエスを信受、体受する者の霊的生命は「永遠」であり、「永遠に死ぬことはない」と宣言されている（25・26節）ことも。

他方、地上においてキリストを信受して生きること、働くことには苦難や犠牲を伴う。福音書では、主イエスが山上で栄光の姿に変貌される前には、ご自身の十字架の死の苦難を予告しておられる。私たちも、苦難や犠牲を主からいただいた「己が十字架」と受け取り、キリストに全托し、主がその重荷を共に負い、栄光の姿に輝かせてくださること（苦難から栄光へ）を信受し、雄々しく進みたい。

N兄が狭心症の手術を無事終え、先週に引き続き今日も証言に立たれた。お顔の表情、声の張り、動作とも、元気を回復されたことが明らかであり、感謝であった。

集会後は、体調の都合で出席は出来なかったが、心を込めて作ってくれたM姉のご馳走を分かち合いながらの楽しい愛餐のひとときを過ごした。



火の中、水の中を往くときも

2016年3月6日

聖書朗読 イザヤ書43章1～7節

今日は、少人数の集会でしたが、奥田先生は、東京で集会をされて、昨夜帰られたにもかかわらず、イザヤ書43章を軸にして力強い講筵をされました。

日本においては、残念ながら、この世で何が一番大事であるかを教える教育がなされていません。人生の旅路は、人生において何が大事なものをかを探し求めて歩み続ける旅ですが、この国の教育はその肝心要な^{かなめ}ことを教えていません。お正月に御来光を拝みますが、太陽が指し示している、万物を照らし命づけている神御自身（キリスト）に気づき、これを行なうことをしていません。

私たちは、幸いなことに見えない本物の世界を与えられています。したがって、影の世界であるこの地上において、見えるものではなく、永遠に存続する見えない天上の世界に目を注いで歩んでゆかねばなりません。

誰しも皆、いずれは、神様のもとに帰って行きますが、それまでの間には、悲しいこと、苦しいことなど様々なことを体験しなければなりません。福音は、知識の世界ではなく、実生活がその修練の場なのです。生活そのものが福音を生きる場なのです。たとえ、

「火の中、水の中を往くとき」

のような過酷な状況にあっても、私たちが生き活きと生きている姿が、福音を実証しているのです。そのためには、私たちが、キリストと一つとなる本物の生活をしていなければならないません。

「主様。あなたが主役です。あなたが導いてください。」

との祈りをもって、キリストの言葉が真実であることを証ししてゆく使命があります。

「主様！」

と一言叫べば、キリストの霊が私たちの中に入ってきて、キリストと同質の力が与えられ、守りと導きがあります。

「汝らこの世にては艱難あり、されど雄々しかれ」

との御言葉が響いてきます。そして、「火の中、水の中を往くとき」も、キリストの平安と勝利を与えられ、主様の中にあることが実感されます。福音の世界は、永遠の命を賜っているのです、ポジティブな喜びの世界です。

キリストの栄光を伝えてゆく民として進んで行きたく願っています。

引用聖書…ミカ書4章5節、コリント後書5章、ペテロ前書1章



神の護りと導き

——ヤコブの旅路にて——

2016年3月13日

聖書朗読 創世記28章10～22節

「また我、汝とともにありて、凡て汝が往くところにて汝をまもり、汝を此地に率返るべし。我は、わが汝にかたりし事を行ふまで、汝をはなれざるなり」

(創世記28章15節)

現世、地上には、罪の呪いと悪の誘惑があります。人の心に計ることはいつも悪いことに傾きます。

そのような中で、主様は御業をどのように行われるのでしょうか？

罪ある人の歩みは、主様の御業を妨げることにならないのでしょうか？

エサウは、利那的で、主様の祝福よりも今の必要を大切なこととし、ヤコブに長子の権利を売りました。

伯父ラバンの欺きや、ヤコブの偏愛、そして妻たちの妬みや争いのあったことを、聖書は臆することなく記しています。

ヤコブは、旅路の中で弱さを知り、主様にいつも祈り、助けを求めました。

ヤコブの祈りは、主様にヒント(焦点)を合わせ、波長を正しく受け取る至誠の祈りです。

主様との関係の回復は、人との和解を必至としています。不思議にエサウの怒りは静められていました。

主イエス・キリスト様は、全てを包みながら善悪を超え恩讐の彼方に摂理を実現なさいます。

今日も主様の護りと導きの中でキリスト様にフォーカスしましょう。



生命への道

2016年3月20日

聖書朗読 ヨハネ4章1～14節

来る3月27日(日) 午後の復活節講演会では、『永遠の生命』を生きる」と題し、奥田先生に語って頂く。今日の講筵では、その準備を兼ねて、「生命への道」について、申命記の御言から学ぶことになった。旧約を題材としながら、私たちの思いは、常に、主キリストは「生命」をどの様に語っておられるかに注がれている。

申命記では、「生命」について、神の命じる掟と法を忠実に行うこと、唯一の神を全身全霊で愛すべきことなどが命じられ、その結果として、民に、与えられた土地で長く生きること、主から祝福を受け、幸いを得ることができると約束されている。このように、旧約の世界では、民が神の掟に従い、これを忠実に行うことが求められ、その効果として生命を得、幸いをもたらされる(申命記4・1～14、5・1～22、6章など)。

一方、新約の主キリストは、私たちに恩恵として「人を活かす生命」、「地上の生を越えた永遠の生命」を差し出してくださっており、特にヨハネ伝は永遠の生命に関する御言があふれている。

「わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし。」(ヨハネ4・14)

「我は生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信受する者はいつまでも渴くことなからん。」(ヨハネ6・35)

「永遠の生命は、唯一の真の神にいます汝と、なんじの遣し給いしイエス・キリストとを知るにあり。」(ヨハネ17・3)

奥田先生は、講筵の中で、キリストの差し出してくださっている生命の次元は、旧約のレベルとは段違いに高いこと、旧約ではこの世の次元、肉の次元に留まっているが、新約では、この世を越えた永遠の生命の次元、霊的な次元がはつきりと約束されていると語られた。この受難週、そのことに向き合い、主の十字架を深く思い、主が私たちのために生命をかけてくださった事实に、祈りを合わせたい。

集会の中で2回、讃美歌136番(「血潮したたる主のみかしら」)を歌い、

「十字架に顕れし主の愛」

を心に刻んだ。



「永遠の生命」を生きる (続)

2016年4月3日

聖書朗読 □マ書8章1～11節

満開の桜と、咲き乱れる雪柳が美しい春爛漫の日に、鴨川の畔の「祈りの家」では、復活節・講演会感謝集会がもたれました。先生の講筵内容は、復活節の講筵をさらに進化された深い次元のものでした。パソコンの不調により、途中でユーストリームが途切れて録音もできなかったことが悔やまれます。ご希望の方は、是非テープによりお聞きになることをお勧めいたします。

人の生き方は、神様を出発点にするか、自分を出発点にするかで根本的に違ってきます。自分を出発点とする人は、自分の努力の結果を認めて欲しいと願い、自分に栄光を帰し、他人を裁くという生き方になります。このような生き方の人は、地上のことのみを考え、神様のことや永遠の生命のことには関心を持ちません。

神様を出発点とする人は、自分の無力さを知り、自分の努力ではなく、神様の恵みのみを受け取り、神様の御心に従って歩むという生き方になります。主イエスの十字架上の死に自らを重ね合わせ、主イエスのご復活に与り、御霊の生命を頂きますと、霊の人に変貌させられ、キリストの御霊が宿り、神様の御心に従って歩むことができるようになります。その人にはキリストから永遠の生命が与えられ、肉体の生命の限界を乗り越えて進んで行く生命力が与えられます。キリストの霊が宿れば、死に定められた肉体ですら死を克服して生きることができるようのです。

そして、大事なことは、キリストから永遠の生命を与えられた者には、それを他者に分かち与えて伝えてゆく使命も与えられることです。その使命とは、キリストの歩まれた生き方と同じ生き方をするということです。ローマ書8章17節にあるように、キリストと苦難も栄光も共にする生き方です。地上にある限りは、苦難を背負いながら、それを突破してゆくというキリストの歩まれた道を共に歩むことです。この使命のある限りは、この世の生命を超える力を与えられ、死ぬべき体をも生かしてください。永遠の生命をいただいた者は、自分の力に頼らずに、全てをキリストに委ね、

「あなたの導きに委ねますから、護りと導きの中で進み行かせてください」との祈りを常に持つて日々を過ごすようにと願います。

聖書の引用箇所…ヨハネ伝3章13～21節、4章14、36節、5章24～29、39節、6章27、40、47、51、53～59節、8章12節、10章28節、11章25～26節、ガラテヤ書6章8節、ピリピ3章18～21節。



無為自然

2016年4月10日

聖書朗読 詩篇46篇

「神はわれらの避所また力なり。なやめるときの最ちかき助けなり」(詩篇46篇)
讃美歌461「主われを愛す」

神様は、あなたを愛しておられます。

そして、もしあなたが神様に委ねきつてしまえば、

神様は行くべき道を導いてくださるだけではなく、生きる力をも与えてくださいます。

それもただ生きるためだけの力ではなく、豊かに生きるための新しい力がみなぎります。

神様、私は今まで、我が計らい、我が思い、のやり方で人生を生きてきました。

今、あなたのガンバラナイ方法(我を張らない)で生きて行きたいのです。

私にはイエス・キリスト様の助けが必要です。

今、無条件降伏し、私の人生の支配権を喜んで明け渡します。

私をあなたが望まれる人間にしてください。

て、
キリスト様に自分の意志(ガンバレガンバレの律法)を完全に明け渡すこと(「無為」)によつ

「自ズカラ然リ」(自然)

の豊かで意義ある人生(無欲、柔軟、謙虚)、愛、喜び、平安の日々を、思い煩いなく歩めます。
感謝



たとえ地は震うとも

2016年4月24日

聖書朗読 マルコ伝13章1〜13節

熊本地方を襲った大きな地震に、多くの国民が心を痛め心配している。一人ができる支援は誠に小さいが、日々の復興を念じ、支援の祈りを継続させたい。

今日の講筵は、熊本地震に思いをさせつつ、聖書にある「建造物の崩壊」、「地が震う」などの箇所に向け、キリストの有とされた私たちの立ち位置を確認し、学ぶものだった。取り上げた聖書の箇所は、マルコ伝13章のほか、マタイ伝24章、25章、ヘブル書11章、12章、詩篇46篇などだった。先生の語り口の要旨を書いてみる。

1、聖書には、これらの災害が起きるとき、偽預言者の出現、戦争、迫害、愛の欠乏などが起こると書かれている。キリストは、

「終わりまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

と言われた。災害がいつ来るか分からないように、キリストの再臨もいつなのか誰も分からない。天地は過ぎゆくが、キリストの言葉は過ぎ往くことがない。だから、忍耐を心掛け、目を覚まし、いつも祈り心で過ごしたい。

2、主は、「各人の能力に応じて」賜物をお与えになる。私たちは戴いた賜物を用いて、その人らしく忠実に働き、為すと善い。

「主よ、私の全存在はあなたのものです。小さい捧げものですが、主の御旨、御意に即してお使いください。」

との心根で。

3、私たちは震災に遭われた方に、先ずその平安を祈りましょう。痛みを分かち合うこと、共に祈ることが大事です。その祈りの中から、各自、為すべきことが示されるかもしれません。同時に、私たちキリストに在る者は、地が震おうとも、山が揺るぐとも、それを乗り越えた「震われぬ国」を戴いていることを自覚すること。そこは見える世界を突き抜けた、天にある更に勝りたる所である。その戴いた天来の生命^{いのち}で、善き働き人でありたい。そして地上の旅路を、聖霊の導きに委ね、感謝しつつ進みましょう。



熾んなる大生命の福音

2016年5月1日

聖書朗読 イザヤ書40章1～11、27～31節

「然はあれど、エホバを^{まことの}俟望む者は、新たなる力を得ん。また鷺のごとく翼をはりてのぼらん。走れども疲れず、歩めども倦まざるべし」(イザヤ書40章31節)

主様は苦しみを見て見ぬふりをしているから不公平だなどと、どうして言えるのですか。まだわからないのですか。全世界を創造した永遠の主様は、絶対に疲れたり、ふらついたりしません。主様の摂理の深さを推測できる者は、一人もいません。主様は疲れた者に力を、弱い者に活力を与えます。若い人もくたくたになり、壮年の者もまいってしまします。しかし、主様を待ち望む者は、新しい力が漲り、鷺のように翼を張って舞い上がります。いくら走っても疲れず、どんなに歩いてでもへこたれません。

先生は、ペンテコステを前にして、熾んなる大生命に抱かれ聖霊様に溢れ、御言葉に燃え立つ講筵をなされ、召団メンバーたちの心を惹きつけ、成熟するにつれて若くなることを存在で顕されました。

「信仰があるとかないとか、生まれつきの性質が良いからだとか、悪いからどうだといったこちら側の性質や状態とは関わりなく、絶対の愛そのものであり給うキリストの霊的大生命の福音を賜り、それだけを頼りにして生きています」

と証言されました。

先生が若かったときは、集会の若者数人と朝、若王子山に登り聖書を読み大声で祈ったとのこと。その話をうかがって、近々に若王子山で世の人々を集めて「山上の垂訓 伝道講筵会」を開催するようになれば素晴らしいと待望いたします。



キリストの御霊に在りて生きる

2016年5月8日

聖書朗読 使徒行伝2章1〜24、33〜42節

京都キリスト召団が、クリスマス集会、復活節集会とともに、大切にしているペンテコステ（聖霊降臨節）集会には、多くの兄弟姉妹が集われて、久しぶりに活況を呈しました。先生は、

「キリストの御霊に在りて生きる」

という主題に込められた深い意味を全身からの告白をもって語られました。私たちの原点は、

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早我生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。」

のガラテヤ書2章20節にあります。

この現実を体受すること、すなわち、古い自分を捨てて、全身全霊をもって十字架の主様を受け取る祈りの場に、キリストの御霊が臨み、わが中に御霊のキリストが生きてあり給うという、御霊のキリストと共に生きる生き方へと変えられます。

主様は、常に自分を何者ともしないで、父なる神に絶対的に委ねられた結果、そこに聖霊が臨みました。私たちも、

「主様！ 全てを主様から頂かなければ自分では何もできません、限りなく十字架の主様と一体とならせてください、御心になつた生き方をさせてください！」

という祈りによって、深く聖霊（キリストの御霊）を受け取ることができます。十字架と聖霊は、常に一如一体の事態なのです。

御霊のキリストが我が内に生き給うという自覚をもって毎日を新たにされて生きると、人の計らいによってではなく、聖霊の導きによって自然に道が示されて、ある時には奇跡のようなことが生じることもあります。

さらに、大事なことは、神様から聖霊の愛を流していただいたなら、それを横（他者）に流してゆくことです。神様から与えられる様々な聖霊の賜物は、手段にすぎません。聖霊の本質、聖霊の命の世界は、コリント前書13章でいわれている愛の姿です。聖霊を受けた人のあり方は、愛に徹しているか、人に愛を与えているかです。そのような生き方をして始めて、聖霊を受けた人ということができます。

引用された聖書の箇所…

コリント前12、13章、ガラテヤ2、5章、コロサイ2、3章、ロマ5章。



此の火すでに燃えたらんには

2016年5月22日

聖書朗読 ルカ伝12章35〜40、49〜53節

講筵の前の証言で、先週行われた福音特別セミナーの様子を司会者が紹介した。また、参加できなかった数名から、京都の集会場で、セミナーの宿題聖句を声に出して読み合い、祈り会を開いて恵まれたとの麗しい証言があった。

それを受けて奥田先生は、次のように話された。集会に連なる一人ひとり、キリストの体であるエクレシア（集会）を形成する大事な個であり、各自がその自覚を持つことが大切である。伝道（福音を伝えること）の主体は主キリストの体である集会（召団）であり、各人はその使命の担い手であって、単に個人の救いの次元で満足するのではなく、福音伝道という使命を担う集会の一員であるとの自覚を持って、キリストを告白し証しするよう努めて頂きたい。「私なんかまだまだ」と躊躇する引つ込み思案のあなたに対し、主は、

「十字架でお前の引つ込み思案（古い我）を片づけたよ、自分へのこだわりから解放したよ。新しい我で生きるのだよ。」

と励ましてくださっており、私たちは、幼子の心、無者の姿で、主様の働きに身を委ねていくだけです。全托すれば主ご自身が働き、御業を成してくださる。日々を主にある者として生業に励む。外での仕事であろうと、家庭での家事であろうと、あなたの置かれたところ、主と共に日々を過ごすように心がけて頂きたい。その日々の営みの中で賜った恵みを集会の「証言」^{あかし}で語ってほしい。一週間のうちに必ず何かあるはずです。

続いての御言葉の学びでは、今日の朗読箇所その他、エペソ書4章、ヨハネ伝14章、使徒行伝1章から3章、コリント前書1章、2章、3章16〜17節、6章19〜20節、7章22〜24節などの聖句に目を留めた。中でも、集会のあり方として、エペソ書にある

「謙遜、柔和、寛容を基とする御霊の賜う一致」

の箇所心引かれた。また、主の霊火が降って燃え上がったら、主が地上でなさった業よりも大いなる業を私たちが為すこと、それはペテロ、パウロら使徒たちが「御霊のキリスト」と一つとなって御業を為していったのと同じであると。

「私たちは、聖霊のキリストと一つとなり、キリストが地上では出来なかったことを為していく使命があるのです。書かれた文字では生命^{いのち}を伝えることは出来ません。福音の『生き証人』でなければ『聖霊の子』を生み出すことは出来ないのです。こちらは空っぽ、平伏しです。」



モーセへの語りかけと御旨の成就

——出エジプト記(1)——

2016年5月29日

聖書朗読 出エジプト記3章1～14節

先生は、夏期特別集会において、旧約聖書の中で神から語りかけられた者(召命を受けた者)は、神の語りかけに対し、どのように応答しているかを見て行きたいと予告されました。今日は、その嚆矢として出エジプト記のモーセの召命の箇所を語られました。

モーセは、40年間ミディアン地で燃え尽きたように静かに暮らしていましたが、80歳になった時に、燃え尽きない柴の炎の中から神の語りかけを聞きました。神様は、隠遁していたモーセを用いようとして、モーセに現われたのです。驚いたモーセは、神様に対し、

「わたしは何者でしょう。」

と問いかけましたが、神様は、それを無視して

「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。」

と宣言されました。

私たちに対して、主様は天界から降つてこられ、一人一人にこの世での困難な使命や課題を与えられます。私たちは、この神の働きかけに対してどのように応答したら良いでしょうか。私は、その任に耐えられないといって断りますか。そうではありません。主様が私たちを遣わされ、聖霊の主様が共にいて用いようとするのですから、その命に従つて主様と共に生きていけば良いのです。出エジプト記の中で、モーセに導かれた民は、目の前のことにとらわれ、何かあった時には慌てふためき、現状からの脱出だけを考える箇所があります。

しかし、キリストに導かれた者は、どんな状況におかれても動じません。御霊のキリストが共におられるから、いかなる苦難にも耐えることができるのです。全存在をもって、血の贖いをもって、私たちを助けられた主が付いておられるということは、最大の力となるのです。私たちは、栄光をいただくなら苦難も共にいただき、どんなときにも生き生きとしている生き方をもって主をこの世に証しする使命があります。

「この小さき群れがあなたの証し人となるように導き、お遣わしく下さい」との祈りをもって主様に仕えて行きましょう。



旅路における神の護りと導き

——出エジプト記(2)——

2016年6月5日

聖書朗読 出エジプト記13章17～22節

「エホバかれらの前に往き給ひ、昼は雲の柱をもてかれらを導き、夜は火の柱をもて彼らを照して昼夜往きすすましめ給ふ」(出エジプト記13章21節)

キリスト者の生涯は、しばしば試練にさらされ、義務を果たすことが困難に思われる時、前方には滅び、後方には束縛や死が迫っているように考える。それにもかかわらず、主様の御声は明らかに

「前進せよ」

と語っている。私たちの目が、暗黒を貫いて見ることができなくとも、また、冷たい波を足もとに感じて、私たちは、この命令に従わなくてはならない。前進を妨げる障害物に、ためらったり疑ったりしていても、それが取り去られることはありません。

エジプト人にとって、暗黒の壁であった雲は、ヘブル人には全陣営を照らし、彼らの行く手に光を投げかける大いなる照明であった。そのように摂理のうちになされることは、信じない者には暗黒と絶望をもたらすが、主様に全托する者には、光明となります。

主様が御導きになる道は、荒野や海を通っているかも知れませんが、安全な道なのです。

先生は、主イエス・キリスト様の語りかけに全托して雄々しく前進することを勧められました。



十戒の授与

——出エジプト記(3)——

2016年6月19日

聖書朗読 出エジプト記20章1～21節

梅雨らしい聖日の朝、雨の音を聞きながら、祈りの家では御言葉が今日も語られている。机にはアジサイが一輪。

今日は、出エジプト記の19章から23章までを学んだ。今日の箇所は、神がイスラエルの民に、信仰生活、日常生活に当たつての律法、戒め等を事細かに告げるところである。神は、具体的に「言葉」をもつてモーセや民に語りかけ、イスラエルの民を導いている。今日の箇所では、神は先ずモーセに次のように語りかける。

「わたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあつて、わたしの宝となる。聖なる国民となる。」(出エジプト記19・5)

続いて20章の「十戒」の場面で、神はモーセに、先ず、自らがイスラエルの民をエジプトの地から脱出させた実力ある神であること、この神にのみ仕えること、主の名をみだりに唱えてはならないことを示される。4番目に安息日を守ることが語られていることに注目したい。安息日は仕事を休み、神様から活力をいただく日であり、神は安息日を祝福して聖別されたとある。また、23章12節には、この安息日が、人だけではなく、女奴隷の子や寄留者、そして家畜も休みを得て、元気を回復する日と書かれている。私たちは日頃、仕事、家事、用事等に追われ、主の御意を振り返る時がなかなか持てない。せめて日曜日は、主の前に静かに座り、聖霊の力による元気を戴きたいものである。

奥田先生は、モーセやアブラハムが神と具体的に言葉のやりとりをしていることに驚くと話される。更に先生は、

「今やキリストは、聖霊となつて聖書の御言葉をもつて、私たち一人ひとりに語りかけ導いておられる。それは太陽の光、暖かさが一人ひとりに届いているように、万人に向けられている。私たちはこの聖霊をいただいて、新天新地への旅路を導かれていく群なのです。」

と。これを聞いてへブル書1章を思い出した。

「神むかしは預言者等により……先祖たちに語り給いしが、この末の世には御子によりて、我らに語り給へり。」(へブル1・1～2)

と。



執り成しの人モーセ

――出エジプト記(4)――

2016年6月26日

聖書朗読 出エジプト記32章30～35節

Mさんの持参された美しいアジサイが机上を飾り、主の護りによって回復されたN兄、N姉の久しぶりの出席で、賑やかな集会になりました。

出エジプト記の最終回ということで、先生は、駆け足で沢山の箇所に触れられました。最初に、出エジプト記32章32節のモーセの告白に強く打たれたことを語られました。それは、モーセが、不満ばかり言う民のために、自らを投げ捨てて執り成しの祈りをしたことについてです。正に、キリストが、私たちの罪の赦しを願って、神に棄てられる道を選ばれた(マルコ15章34節)ように、もし民の罪が許されないのなら、神の書から自分の名を消し去ってください(民の罪を負いますから)との祈りでした。

このように、真理を歩む者に対しては、厳しい現実が伴います。神様の意思によって召し出された者は、モーセやキリストと同じように、自分を捨てて執り成しの祈りをするために厳しい道を歩まされます。しかし、その行く手は、神様の導きと護りの中にあるので、どのような事態に遭っても平安のうちに乗り切ることができます。

そのような道を歩まされるためには、モーセのように絶えず神様と交信することが必要です。サムエル記上3章10節に

「しもべ聴く。主よ、語りたまえ。」

とあるように、

「主様、どうぞ私にお語りください。」

という心根で主様に問いかけ、主様から直々に答えを聴いて進むことが大事です。人に頼り、人から答えを求めるのではなく、主様の御言葉が進むべき道を示す灯火となります。そして、主様の御言葉を聞いた以上は、御言葉を大事にして、語られたことをしっかり守り、それを実行してゆき、

「我は道なり、真理なり、生命なり。」

の事態を身証してゆくことを主様は期待しておられます。

聖書引用箇所…コリント後書3章、ヘブル書7章から13章。



「キリストの福音」対「モーセの律法」

——レビ記(1)——

2016年7月3日

聖書朗読 マタイ5章17〜48節

「誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法おきての一点、一画すたも廃すたることなく、悉ことごとく全まことうせらるべし。」(マタイ福音書5章18節)

ここでキリスト様は、律法が過去において、また当時何を要求したかということばかりでなく、これらの律法の要求は、天地の続く限り継続するものであることを教えられた。

「わたしはある」

と言われた御方(神)の律法は、神の御座と同様に不変のものです。

イエス様は、当時の律法学者やパリサイ人の偽善的・表面的な「律法遵守」が人々の日常生活を苦しめている状態を打破し、律法の源である

「父なる神」

の恵みの「福音」の事態を体現されました。今日の講筵で、先生はモーセ五書の中で、旧約時代には、イスラエル人の生活規律の拠り所となっていたレビ記を取り上げて、

「焼き尽くす献げ物」や「贖罪の献げ物」

の儀式と内容が主イエスの十字架による贖罪の予表であること、また、19章において、命令や禁止の戒律が宣せられる末尾に、

「わたしは主である」

との宣言が続くことに注目された。主であるイエス・キリスト様がいてくださるからこそ、私たちはその導きと守りの中で、御心に適う日常生活を全うできることに感謝し、御名を讃えたい。

旧約を尊重しながらそれを乗り越え、その奥義を開示されたキリストの福音は、ユダヤの制度を明らかにし、神聖法典を意義深いものにされました。新しい真理が啓示されるにつれて、初めから与えられていた真理がより明らかに示され、私たちが新しい光に浴すること、人間を救おうとされる御心のあらわれである贖罪のご計画が、さらに明らかに理解されるようになります。

私たちは、先生の靈感のなかにイエス様の新しい美と力と愛の法を見てまっとうな生き方を活きましよう。



十字架体受

2016年7月31日

聖書朗読 詩篇84篇

「なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり。

われは悪の幕屋にをらんよりは、寧ろわが神のいへの門守^{かどもり}とならんことを欲^{ねが}

ふなり」(詩篇84・10)

本日の講筵は、ベートーヴェンのソナタ形式のように三部構成でした。

十字架体受

奥田昌道先生は、

「十字架を仰ぎ見るレベルではダメで、自分も一緒に十字架され体の中に十字架が立っている」

と、イエス様との一体の生き方を語られました。

「我思うゆえに我あり」

ではなく、体受、身体で受け取る世界です。

「我愛すゆえに我あり」

です。

天国の大庭

挿入部分として十字架のつぼみの中の天国を開示されました。

真理を体受することを道といいます。イエス様は、

「我は門なり」

とも言われました。十字架という門を通るとエホバの大庭に安住できます。

バプテスマ(無理心中)

イエス様が私の知らない時に、知らない所で、既に十字架上で私を葬ってくださいました(無理心中を遂げてくださいました)。それで私は永遠の生命へと変貌させられました。死がすなわち生であり、十字架のキリストが復活のキリスト様に転じ、このキリスト様に飛び込む祈りになると、御霊のキリスト様がわたしの中に生きてくださいます。これが天国です。

イエス・キリスト様の十字架磔の上に純金で建てられたエクレシアは、火でテストされる時も平安です。



「直ちに」の福音書 マルコ伝

2016年7月24日

聖書朗読 マルコ伝1章1〜31節

7月10日の通信に書かれていたように、奥田先生は、珍しく体調を崩されて数日間苦しまれたようです。その苦しみの中から思われたことは、

「福音は『直ちに』の世界である。『そのうちに』の世界ではない。」

ということでした。今日は昨日の続きではなく、明日は今日の続きではありません。人は、色々と計画を持っていますが、計画通りにはゆきません。明日のことは分りません。ヤコブ書4章13節以下にありますように、人の生命はかないものです。主様があつてこそ私たちの本当の生命の世界があるのです。主様は、私たちの思う以上に、私たちのことを配慮されています。福音は、主様ご自身が「私が働くから、自分の計らいを捨てて、今この瞬間に、あなたの全存在を私に委ねなさい。」という差し迫った現在の世界です。

また、先生は、人生は、イザヤ書の35/53（53分の35）であることも考えさせられたとのことです。イザヤ書35章は天国の姿、53章はキリストが十字架で世の苦しみを背負われた姿です。私たちの人生は、35/53であり、いずれか一方だけではありません。地上では53の苦しみが強いと思われる方には、天国では35の世界が待っています。地上では35の世界ばかりである方には、天国では53の苦しみが待っているかもしれません。この地上が53の世界であると思われる時には、キリストと一緒に担ってくださることを信じてください。主様の栄光を現すために、53の世界に置かれているのです。この地上の苦しみは、訓練の場です。試練によって霊が高められてゆき、天国で本当の祝福に預かることができます。キリストに従わんとする者は、この世のことだけを考えて生きないで、自分の十字架を負って従うのです（ルカ9章23節）。そうすると、35の世界に入ることができるのです。そして、天国への準備期間として生かされている間は、主様が、

「人の子が来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためである。」

と言われたように（マタイ20・24〜28、マルコ10・41〜45、ルカ22・24〜27）、人に愛を持って仕えることが必要です。主の御心になうなら何でも喜んでさせていただくという心根が大切です。

私たちは、地上だけでない永遠に通じる生き方を学ぶために日曜日ごとに集まっています。私たちの集会は、御言葉が語られており、聖霊によって導かれています。キリストの招きは「直ちに」でありますから、この世のほかのことは差し置いてでも集会に出席するという気合いが必要です。聖日を忠実に守ってください。

引用聖書…ヤコブ書5章、箴言3章、ヘブル書12章、ガラテヤ書2章20節。



「現在」を「終末」として生きる ——「祈り」をもって——

2016年8月7日

聖書朗読 マルコ伝13章1～13節

今日の講筵で奥田先生は、この世で生きる私たちの現在を終末と受け取り、終末の迫りの中で祈りをもって生活するようにと語りかけられた。今日の朗読箇所マルコ伝13章には、イエス様が、終末の徴として、自分の名を名乗る者の出現、戦争、地震、飢饉などが起こると答えられたことが記されている。

講筵の中で先生は、7月24日の集会『「直ちに」の福音書マルコ伝』と、7月31日の「十字架体受」を振り返り、次のように話し出された。福音は「直ちに」の世界であり、「そのうちに」ではない。福音への招きがあれば「直ちに」身を委ねること、自己中心的な生き方から神中心の生き方へと直ちに路線変更すること。また、主キリストの十字架の場で、自分も一緒に十字架されていることを深く受け取り、終末が近いことに、いつも心を向けていることが大事である。

現在を終末として生きるとは、この世（肉の次元）から脱出して御霊の次元で生きることであり、ガラテヤ書2章20節の心である。福音こそが「終末」の迫りの中で語られており、イエス様御自身、十字架の迫りを身に帯びながら弟子たちに熱く語られた。今日の関連箇所としてペテロ前書4章7～14節を引かれたが、ここは召団讃歌A9「世の終末は」に歌われている。

私たちは、「終末」と聞いてもその切迫感を十分受け取っていない。しかし、今の時代、頻発する自然災害や、国と国、人と人との争いの激化、地球環境の悪化、そして何よりもキリストの御言葉を聴く飢饉などを考えると、問題はますます深刻化し、解決への困難さが認められる。主は、その終末への迫りの中で、忍耐と御言葉を守ること、目を覚まし祈りを欠かさないことを勧めている。今年の夏の特別集会の準備も、この角度から御言葉を読み、祈りをもって臨みたい。

〔註 A9「世の終末は」(1980.1.18) (讃美歌513「あめにたから」の曲で)〕

- 1 世の終末は近づきたり。心こめて祈らん。主にありてぞ世をば愛し、聖国の民を創造らん。
- 2 火の試練近づきたり。キリストの名のため譏られなば 幸いなり、み霊うちに燃ゆれば。
- 3 み霊によるたまものをば、惜しみなくほどこし、魂の宝天に積み、聖民の証しをせん。



祈りて待ち望む

2016年8月21日

聖書朗読 ルカ伝12章35〜40、21章29〜36節

厳しい暑さの中、今日も私たちの祈りの家に、主にある兄弟姉妹が集う。奥田先生は、暑さにめげずに集った私たちを労って言われた。

「世の人は皆さんを『この世ならざる人の群れ』、『絶滅危惧種』と呼ぶでしょう。

しかし主は、『汝らは地の塩、世の光なり』と呼び掛け、天に財宝を積む者、主の栄光を担う者として尊んでくださっています。」

今日は、特別集会を今週末に控え、その準備の祈り会だった。奥田先生は、講筵の中で珍しく、「聖歌」3曲を続けて歌うことを希望された。その歌は117番「イエスより流るる」、570番「雨を降りそそぎ」、608番「イエスはわがいのち」であった。先生は、聖歌は素朴で庶民的であるので好きでよく歌うが、608番は自分の心に一番ピッタリすると話された。主を全身で喜び讃美する人生の歌なので、各地で集会だよりを御覧になる方も、是非、味わっていただきたい。

講筵では、今日の朗読箇所を中心に、ルカ伝8章、12章、13章などから御言葉戴いた。主は、たとえ話の中で、婚宴から主人が夜遅く帰宅しても、燈火を灯し、目を覚まして祈りの備えをしていなさいと勧められる。新郎を迎え出る10人の乙女の話（マタイ伝25章）もあり、私たちも聖霊を戴く準備を怠らず、主の御声を聴けば、直ちに実行する魂でありたい。

「良き地なるは、御言を聴き、正しく善き心にて之を守り、忍びて実を結ぶ所

の人なり。」（ルカ伝8章15節）

先生が今日話されたとおり、特別集会に各地から訪れる兄弟姉妹を「おもてなしの心」で迎え接したい。そして、特別集会の3日間は、小池辰雄先生が「京都召団讃歌」（聖名に在りて）で歌われたとおり、皆さんと共に、「十字架されし み霊の身であること」「み霊の力を受けて働く一人ひとりであること」に心を集中したい。

〔註 C2「京都召団讃歌」（1979.12.4）（讃美歌404「山路いえて」）〕

- 1 聖名^{みな}に在りて古都京都に、四方^{よも}より集うは み霊の子ら。
- 2 鴨の流れ 比叡の峯、窓べに眺めて 尽きぬ想い。
- 3 春はみどり 萌ゆる若葉、希望^{のぞみ}の光に 胸は躍る。
- 4 秋はもみじ 燃ゆる紅葉^{べにば}、愛の篝火^{かがりび}を 胸に点す^{とも}。
- 5 聖書を読み 祈り入りて、み霊の力を 受けて歌う。
- 6 十字架されし み霊の身^みよ、我らかくて生く、とこしなえに！
- 7 力に満ち 愛に溢れ、聖名を讃えつつ 再^{また}た会^あう日本まで。」



天国人

2016年9月11日

聖書朗読 マタイ伝5章1～16節、43～48節

先生は、夏季福音特別集会在来年も開催されるかどうか分からない、今回限りの集会と思つて心して臨んで欲しいという、終末的な迫りの中で5回の集会を持たれました。例年以上の出席者がありました。全員に先生の並々ならぬ心意気と福音に対する思いが伝わったことと思います。今日の集会では、京都の数人の方が特別集会の感想を話されましたが、いずれも深い感銘を受けた旨の証言でした。

今日は、「天国人」と題して、小池先生のエン・クリスト55号（平成8年4月号）を引用されながら、福音の本質を語られました。

私たちは、地上では辛いこと、苦しいこと、悲しいことなど様々な運命・環境の中にあります。この地上における自分の状態だけを見ると、人は、運命・環境に支配されて絶望に陥つてしまいます。それでは、運命・環境に支配されない生き方をするにはどうすれば良いでしょうか。その秘訣は、この地上でクリストと一つになること、すなわち、クリストの中に祈入することにあります。そうすると、普通の人には運命・環境が不幸と思えるような事態にあつても、また、日常がどんなに辛い苦しい状況であつても、そこが天国に変わり、この地上は天国であるという事態が展開してゆきます。クリストをいただいている人、クリストと一つになっている人には、この地上がどのようなものであつても、既に天国人なのです。そして、クリストと一つになると、不思議なことに運命・環境を乗り越えることができる神秘的な力が湧いてきます。クリストと一体となつていれば、必ずクリストの勝利をいただけるのです。それが本当のクリストの恵みなのです。

クリストと一つになるためには、クリストの十字架の贖いをしっかりと受け取る必要があります。十字架と聖霊が根底にあり、自分は何者でもない、霊貧しきものであるという自覚のもとに、ひれ伏しの姿であるところに、クリストのみ声が聞こえてクリストと一つになることができます。そして、天国人となつたからには、これを地上で実際に実践していることが大事です。それは、各人がどういう行為をしたかではなく、存在そのものがクリストと同じように愛の姿であるかどうかです。



光と闇

2016年9月18日

聖書朗読 ヨハネ3章1～21節

「その審判は、是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。眞をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり。」(ヨハネ福音書3章19～21節)

先生は、更に光に関する参照聖句を挙げられ天国を垣間見せてくださいました。

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」(ヨハネ8・12)

「神は光にして少しの暗き所なし」(ヨハネ第一書1・5)

「その兄弟を愛する者は、光に居りて、つまづきその衷になし。」(ヨハネ第一書2・10)

「凡ての善き賜物と凡ての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父より降るなり。父は変ることなく、また回転の影もなき者なり。」(ヤコブ書1・17)

「汝らは世の光なり。汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。」(マタイ伝福音書5・14～16)

「イエス・キリストの光を遮ることによって影が生じるように、罪という覆いによ

つて神の光がなくなつた霊の闇が地獄です。」(サンダーシング)

一生をイエス様に反逆していた者が、仮に急に天国に移されて、天国を目撃したとしよう。どの人の心も愛に満たされ、どの顔も喜びに輝き、主様と子羊イエス様を褒め称える美しい音楽が聞こえ、御坐に坐して居られる御方の顔からは、贖われた者たちの上に絶えず光が照り輝いている。

真理をにくんでいた者たちが、ここで、天の群れに加わって讃美歌を歌うことができるでしょうか？ 透き通った海水は、彼らにとって責め苦となり、神の栄光は焼き尽くす火となるであろう。

日常の生活から道が自ずと決まっていく。日頃から親しんでいる仲間の所に往く(光の子は、光に往く。闇の子は、闇に往く)。

幸いなことに私たちは、キリスト召団で天国行きの天にふさわしい小さなキリスト者になれるように、天国の言語を毎週学ぶ準備期間が与えられ感謝です。



此の火すでに燃えたらんには

2016年9月25日

聖書朗読 ヨハネ伝1章29〜34節

奥田先生は、28日に84歳になられます。世の通念では、隠居されて静かな余生を過していると思われるでしょう。しかし、奥田先生は、世の通念を突き破るように、今日も1時間40分余りを起立したままで迫力のある福音を語られました。神様から、キリストを伝える使命を託されていると思われました。

ヨハネ伝1章29節以下で洗礼者ヨハネは、イエスを

「世の罪を除く神の羔羊^{こひつじ}」

「聖霊にてバプテスマを施す者」

であると告知しました。キリストによる救いの「二焦点」は、神様に逆らう人間の罪を全部引き受けて十字架にかかり、その死によって私たちの罪を贖ってくださったこと（十字架による贖罪）と、罪「無き」者とされた私たちに「新しい命（新生）」を賜い、「聖霊のバプテスマ」によって、いつも神様の御心に適う生活へと導いてくださることです。

御自身は聖霊の充満体でありながら、弟子たちにも人々にも聖霊を分与することができない嘆きを

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を

か望まん。」（ルカ伝12章49節）

と告白しておられます。そして、十字架上の死を経て栄光の霊体に変貌されたイエスは、使徒たちに「聖霊にてバプテスマを施される」まで祈り待ち望むよう命じられ、遂に五旬節の日に祈りの群れに聖霊のバプテスマが実現しました（使徒行伝1章3節以下）。聖霊に満たされた使徒たちは別人のように変貌しました。私たちも、キリストと共に十字架され、聖霊を受けることによって、始めて変貌して使徒たちのような天来の力をいただくことができます。そのためには、「イエス様あなただけを求めます。」との切なる祈りが必要です。神様は、私たちをパウロのように

「母の胎をいでしより我を選び分ち給うた。」（ガラテア書1章15節）

のです。そして、神様は、地上を来たるべき天界にゆくための修練の場として与えられました。地上で苦しく辛いトレーニングを重ねてゆくことで鍛えられて、天界へ行く道が通じます。私たちは、ひれ伏しの姿に徹して主様を求めてゆけば、神様から見えない形での助けがあります。聖霊に満たされていると、神様は、人のできないことをさせてくださる力のある方です。集会全体が聖霊のバプテスマを受け、一人ひとりに聖霊が降ることを願っています。



人生と京都キリスト召団への応援歌

——ピリピ書——

2016年10月2日

聖書朗読 ピリピ書1章1～11節、4章4～7節

奥田先生は今日の講筵でピリピ書を取り上げ、この手紙を私たち一人ひとりの人生への、そして、京都キリスト召団への応援歌として受けとりたいと話し出された。

ピリピの教会の起源は使徒行伝16章に遡る。そこでは、パウロが、ある幻影に神の御旨を感じてピリピに渡り、祈り場を求めた河のほとりでルデヤという女性との不思議な出会いがあったこと、その後、祈り場へ赴く道すがら占いの霊に憑かれた女奴隷を助けたことで、捕縛され牢に繋がれる身となったが、獄中での祈りと讃美の最中に起こった地震で囚人たちの縄目が解けたのに、誰ひとり逃亡者がいなかったことに獄守は心打たれ、パウロとシラスを家に引き取り全家が神を信じて喜んだ状況などが活き活きと書かれている。

「主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん。」

との御言葉は私たちを強く励ます。今日いただいたピリピ書講筵の力点は次の2点であった。一つは、パウロがピリピの教会の人たちを

「キリスト・イエスの心をもて恋慕う」

とまで言う熱い信愛の絆きずなで両者が結ばれていること。小さな群れの京都キリスト召団への応援歌と言いたいのはその故である、と。

もう一つは、4章4節から7節までの奨めすすの言葉。

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんじら喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ。主は近し。何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」

そのほか、2章12～15節、3章7～14節、同17～21節。特に、
「彼は万物を己に服したがはせ得る能力ちからによりて、我らの卑いやしき状さまの体を化へて、己が栄光の体からだに象かたどらせ給はん。」

が素晴らしい。

新しく、神戸市、東大阪市から先週に続き兄弟姉妹3名が集い、更に本日、鳥取市から兄1名が参会した。先生の語りも、証言者も、集う者の祈りも、皆、強められた。



我にとりて、生くるはキリストなり

——ピリピ書（続）——

2016年10月16日

聖書朗読 ピリピ書1章3～11節、20～21節、2章12～15節

「我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり」（ピリピ人への書

1:21）

パウロは、捕らえられ鞭で打たれながらピリピ召団（エクレシア）を立ち上げました。

それにこたえて、ピリピ召団のキリスト者も、パウロの為に献身的に尽くし経済的必要性を満たしたこともしばしばでした。そのピリピ召団に、パウロは、キリストを信じる者の喜びを心をこめて手紙を贈ります。

「イエスは我が命 また喜び すべてのすべてぞ 我にとりて 生くるはキリ

ストなり」

奥田昌道先生も、キリストの心を心として、殉道したパウロの十字架道に伴走されながら語られました。

この娑婆での試練の時も、今まで同様キリスト様を大胆に語り、また、生きるにしても、死ぬにしても、いつもキリスト様の素晴らしさを身をもって現したい。なぜなら私にとつて生きることは、キリスト様のために良い機会（伝道）を得たことを意味し、死ぬことは、キリスト様のところに行けるので願わしい事です。

しかし、地上では、もつと召団員の役に立てることも事実です。

そうです、私にはまだ、この世で生きる使命があるのです。それで、あなたがたの信仰の成長を助け、もつと喜びに溢れさせるために、きつと、もうしばらくの間、地上に長らえることになるでしょう。 平安



聖書は人生の応援歌

2016年10月23日

聖書朗読 ヨハネ伝14章1～14節

今日は、19人もの兄弟姉妹が参会されました。先生は、22日に開催された「第65回日本学士院公開講演会」の講演を担当されるという重責を果たされた中で、ヨハネ伝14章1節の

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。」

の御言葉が根底にあれば、主様が宿りたまひ、その人にふさわしい働きをさせてくださることを体験されたことを力強く語られました。そして、

「聖書は、人生の応援歌である。どのような苦境にあつても、主様は直ぐ傍らにおられ、大丈夫だと励ましてくださることを確信して、そのことを体験していただきたい」

と続けられました。

講筵の要旨は、次のとおりです。

私たちは、聖書を書物として読むのではなく、実生活の唯中で活きた主様を味わってゆることが求められています。満ち足りた人や傲慢な人には、主様は必要ではありません。人生に躓いた時にこそ、本当の神様に出会えます。この地上は、決して樂園ではありません。悩みや苦勞の連続です。しかし、その困難な地上の歩みの中で、キリストは、向こう側からご自分を現してください。キリストは、その憐れみにより、私たちの生れる前から各人を選んで、一番必要とする時に自らを現してください。キリストは、私たちがどんな底にいる時に救い上げ、

「あなたの過去、現在、未来を全て引き受けたので何も心配することはない。」

と私たちを抱いて運んでくださるのです。私たちが、ご自身と同じ栄光の姿に変えられ、地上での苦勞を突き抜けて天上で輝くことを願っておられます。そして、私たち一人一人に対し、この救いの事態を自分だけのものにしておくのではなく、人生で苦しんでいる人に出会った時に、その人に分かち与えて応援する使命を託しておられます。私たちには、人を神の命の中に導きたいというキリストの御本願に應えて、人に尽くしてゆくという使命が与えられています。

引用された聖書…ピリピ4章4～9節、コリント前書13章、イザヤ書44章21～23節、コリント後書6章1～10節、11章22～33節、12章10節、ピリピ1章20、27～29節、2章13～16節、3章17～21節、コロサイ3章1～4、10～17節。



無力に徹する

2016年11月6日

聖書朗読 詩篇8篇

「なんぢは幼子・乳飲み子の口により力の基^{もと}をおきて、敵に備えたまえり」(詩篇8篇2節)

母の乳房を吸う児の如く

主の御霊をば飲みてぞ生くる

母がすべての幼子のごと

我が身を全く主に投げ入れぬ

主のふところに祈り入りてぞ

御霊は臨み力に溢る

(召団讃歌A19)

奥田昌道先生は、詩篇8篇とヨハネ伝から「無力に徹する」と題して講筵されました。

幼子・乳飲み子にこそ、主様の御力が宿ります。

私たちもあの幼子・乳飲み子のように自分からは何も出来ません。イエス様御自身が

「我自ら何事も成し能わず」(ヨハネ伝5章30節)

と言つて空っぽになつてくださっている。ましてや私たちが、何かが出来るなどとは思いません。相対的には何か出来るかもしれませんが。しかし、唯一絶対なる主様の御前では無力に徹して生きます。どうぞ主様の無限力が、無力な者に宿つて、この世に栄光の顕せる器として御用いください。

「無力に徹する」と自然と必然が一つとなつて課題が出来てしまいます。

それぞれの、神様の種が、おのずと私たちの人生に実をつけるのに任せましょう。

聖書の現実をそれぞれの人生において、実生活の中で体験し、キリストの言葉が今も真実であることを証言していきましょう。 感謝

[註 A19 「母の乳房を」(1980.11.26) (讃美歌538 「すぎゆくこの世」の曲で)

- 1 母の乳房^{ちふさ}を 吸^こう児の如く、主のみ霊^{たま}をば 飲^{のみ}みてぞ生くる。
- 2 母がすべての おさなご^{こと}の如、わが身^{また}を全く 主に投げ入れぬ。
- 3 主のふところに 祈り入りてぞ、み霊は臨み 力^{あふ}に溢る。
- 4 エン・クリストに 生くるわが身に、み霊の力 みなぎりあふる。
- 5 み霊の流れ 脈々たれば、み民われらは 生命^{いのち}の泉。
- 6 み霊の火焰^{ほのお} 炎々^{えんえん}たれば、何をかのぞまん 力ぞみつる。
- 7 いざや我らは 燃ゆるみ霊を、胸中^{みぬち}に宿し 灯^ひを点^{とも}きなん。」



「霊」の生命を生きる

2016年11月13日

聖書朗読 ヨハネ伝6章41～66節

奥田先生は今日の講筵「霊の生命いのちを生きる」を、

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」（ヨハネ伝6章63節）

を中心とし、ローマ書8章1～17節とヨハネ伝3章1～15節をも引きつつ展開された。

聖書では「霊」「肉」は、次のような内容のものとして用いられている。

① 「靈魂」と「肉体」（ルカ伝12章4～5節参照）

② 「天」（神）の次元と「地」（人、土から出て土に帰る）の次元。天は永遠であり、見えない神の次元。地は一時的であり、見える人間の次元。物質界。

③ 「神中心の生き方」（霊）と「自己中心の生き方」（肉）。神中心とはキリストの歩まれた生き方。神の御意を第一とする。「肉」はその反対。神に逆らう生き方。

キリストは、神中心の生き方、御意にかなう生き方を求めておられる。それが命への道であり、そこに本当の生命、永遠のいのちがある。キリストは私たちに、「肉」（罪と死）の生き方でなく、ご自身が歩まれた「霊」（いのち）の生き方を求めておられる。そこに神の次元の命が宿るから。それが真の幸い（恵福）だから。

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は霊なり、生命いのちなり。」

との御言葉に主キリストの深い熱い愛の御思いが込められている。

見える所にとらわれ、一喜一憂する我々に対して、

「私に委ねなさい。私が背負って上げるから」

と励ましてくださる。

「なんじら世にありては（肉の世界においては）患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」

と。「霊の生命を生きる」とは、「霊の人として生きること」であり、神・キリストの御意を第一として生きること。そのためには、生まれながらの「肉」の人から脱皮して「新たに生まれる」こと（新生）が不可欠。キリストがニコデモに語られたように、新たに生まれなければ、神の国（天の次元）を見ることも、神の国に入ることもできない。有難いことにキリストご自身が道を開いてくださった。十字架で「旧い我」を葬り、霊体として顕現された栄光の主キリストがご自身の霊（聖霊、御霊）を無条件に私の中に宿らせてくださる、御霊ご自身が我が内に宿ってください。



天の次元の祝福

2016年11月20日

聖書朗読 エペソ書1章1-14節

奥田先生は、前回の講筵の重要な内容（靈魂と肉体、天の次元と地の次元、神中心の生き方と自己中心の生き方）を再確認された上で、

「今日は啓示を受けたようにエペソ書が浮かんできた」

と、エペソ書を中心にして前回の内容をさらに発展された講筵をされました。

エペソ書は、天の次元での神様の祝福がいかに素晴らしいものであるかを述べた書です。神様は、私たちの見える姿がどのようなものであったとしても、私たちがキリストによって神の子と定められたことを保証してくださいました。すなわち、私たちは、キリストの十字架（贖罪）と復活（永遠の命の実証）に与ることによって天の次元に入れられて聖徒とされ、神様の栄光の誉となる恵みと望みを与えられました。地上では儂い存在であったとしても、天の次元では既に神の子であり、輝いている存在にしてくださいました。

しかし、天の次元のことは、神の霊の次元のことであり、深く厳粛なものです。自然科学で究明できるようなものではありません。マタイ伝14章25節にキリストが海の上を歩かれたことが記載されていますが、これは天の次元を体現されたキリストが物理法則を超えた現実を示された出来事です。

聖書を身読してキリストに繋がることによって、神様から聖霊をいただくと、神様の中に隠されていたものが次第に現れてきて、神様の中に秘められていたご計画が、神様の御心が分かるようになります。すると、私たち自身も、天の次元の霊性が磨かれて深い洞察力を与えられ、困難な世を生きるにあたって正しい道を歩むことが出来るようになります。

この集会は、御霊の主キリストから天の次元の祝福をいただき、天の次元に生かしていただく集会です。私たちがその証し人になるためには、どのような困難があつたとしても、そこを修練の場であると受け取り、鍛えられて、輝いていなければなりません。

私たちは、主キリストにより天の次元の祝福を賜っていることを常に自覚して、神様に感謝し、神讚美・キリスト讚美の日々を送ることが求められています。

エペソ書以外の聖書引用箇所 ロマ書8章34節から39節、詩篇37篇、55篇



我らは生命の御言の伝達者

2016年11月27日

聖書朗読 ペテロ後書1章(全)

奥田先生は今日の講筵で、

「集会準備のため意識せずに開いた聖書の箇所がペテロ後書だったが、読むうちに引き込まれ、この書が遺言の書であり後代の人への励ましの手紙であることに気が付き驚いた。」

と語り出された。先生は、

「聖書そのものが『遺言』であり、後世にこれだけは残しておきたいという言葉の書であって、イエス様の生き方や御業、み言葉も、ペテロ、パウロの生きざまと書簡の言葉も皆そうです。」

とも話された。

ペテロ後書1章12節以下を読むと、確かに遺言の口調である。また、イエス様の山上での変貌の場面にヨハネ、ヤコブと共に居合わせたペテロが、天からの

「これはわが選びたる子なり、汝らこれに聴け」

との声を聞いたこと、先生は、ペテロにとって、この事態は忘れ得ぬ原体験であり、私たちも、聖書の言葉は天の次元から語られており、天の次元、すなわち聖霊の次元で受け取る必要があると語られた。

続いて先生は、以上の心根で詩篇を読むと、詩篇は讃美の書だが、同時に後代に伝えたい感動、体験や事実を伝える「遺言」の側面があると話された。先生が引かれた詩篇は、55篇16以下、57篇7、11、37篇(全)、73篇(全)だったが、私に特に響いた御言は、

「汝の荷を主にゆだねよ。さらば汝をささえ給わん。義しき人の動かさるること

を常にゆるし給うまじ。」(詩篇55篇22節)

「汝の憐れみは大いにして天にまで至り、汝の眞実まことは雲にまでいたる。」(詩篇57篇10節)

だった。更に先生は、私たちに呼びかけられた。

「聖書は、今も私たちに遺言のように語りかけています。皆さんの人生そのものが後代の人への遺言です。私たちは天の生命いのちを戴いている者として、自分の生き方を以って、時が良くても悪くても、大胆に主を告白する使命を託されています。

皆さんは『生命の御言』いのちのみことばの伝達者です。」

と。集会後の食事会・総会では、降誕節集会の取り組みにつき協議するとともに、食事後の満ち足りた中で、日頃聴けないリラックスした感話が為された。



降誕節を前にして

——バプテスマのヨハネ——

2016年12月4日

聖書朗読 マタイ伝3章1～12節

イエス様も洗礼者ヨハネも神学校に行かなかった事に鑑み、京都キリスト召団では、神学校卒の教師は居ません。

旧約の道理からいえば、ザカリヤの息子ヨハネは祭司職のために教育されるのが当然だった。しかしラビの学校の訓練は、彼をその働きにふさわしくない者にしただろう。

神様は、聖書の解釈を学ばせるために彼を神学の教師たちのもとに御送りにならなかった。神様は、彼が「自然」と「自然を創られた神」とから学ぶように、彼を荒野へ召された。

「荒野に呼ばる者の声す『主の道を備え、その路すぢを直くせよ』」（マタイ伝3章3節）

本日の講筵では主様の先駆者としての大事な役割を果たしてくれた荒法師ヨハネの道を辿りました。

旧約聖書の時代（BC）から新約聖書の時代（AD）への架橋かけはしの役割を果たしたのがヨハネであり、イエス様の名を伝え、身を捧げ、最後は非業の死を遂げられました。

主様はヨハネのことを

「預言者よりも勝る者」

「女の産みたる者のうち、ヨハネより大なる者は起らざりき」

と高く位置づけられました（マタイ伝11章9～11節）。しかし、

「天国にて小さき者も、彼よりはおお大なり」（マタイ伝11章11節）

として、イエス様によつて霊の新生を賜った者は、旧約とは異なる別次元の天国人とされることを教えられました。それは、主様が旧約聖書世界とは一段と質が違う新しい天の次元を開いてくださったからであります。イエス様は十字架（贖罪）と聖霊の授与（新生）によつて私たちを新しく「神の子」として生み出してください、神の子の性質（愛）を賜りました。イエス様が永遠の命の世界を開いてくださり、永遠の命となつて私たちに宿ってください、新しい勇気・希望・力をくださいました。ありがとうございます。



「光」

2016年12月18日

聖書朗読 マタイ伝4章12～17節、ルカ伝1章76～79節

今日は、クリスマスの前にして「光」なる言葉を含む聖句に目を止め、聖書にある光の次元を味わうことになった。「光」から連想されるものは「太陽」、「天」、「明るさ」、「解放」などプラスイメーজのことが多い。キリストは、私たちにとつて太陽のような存在であり、いつも変わらず一方向的に、愛、喜び、平安、力、光などを贈ってください。これは御霊の力であつて、私たちを活かし力付け、体全体を健やかにし、目を輝かせ、体のエネルギーになったりする。奥田先生は、「光」が神讃美やキリストの栄光を顕す言葉として、新約聖書やイザヤ書に多く出ていると紹介くださった。沢山の聖書の箇所を話されたが、お話しのごく一端を記載する。

① 「暗きに座する民は、大いなる光を見、死の地と死の陰とに座する者に、光のぼれり。」
(マタイ伝4章16節、イザヤ書9章2節)

光に來る前の私たちは、生きることには呻吟し、迷い、光を得られず、暗くて辛い生活を送っていた。そのようなとき、キリストに出会い光の世界を見、新しい生命をいただき、光輝く存在に変えられた。ルカ伝1章76～79参照。

② ルカ伝2章の「野宿する牧者(羊飼ひ)」、「シメオン老人」の各場面

一晩中の辛い野宿の労働。貧しい名も無き羊飼ひに主の栄光の光が臨み、世界の誰よりも早く「救い主」の誕生を知らされた。シメオン老人は幼子イエスを抱き、

「異邦人を照らす光」

と語るが、他方、マリヤへの苦難の預言も告げている。先生はこの箇所で、

「キリスト誕生の救いが私たち異邦人にも及ぶとはつきり書かれていることに感謝します」

と話された。

③ 「光の子となるために、光のある間に光を信ぜよ」(ヨハネ伝12章36節)

現代の社会において、「光」の言葉、まことの救いの福音が語られる場は多くない。「光」があなたに向かつて輝いているとき、太陽に向かつて全開して咲く大輪の「ひまわり」のように、「光」をしつかりキャッチし、「光の子」と成るように。その他「光」につき、ヨハネ伝1章1～14節、同8章12節、コリントⅡ4章4～6節、エペソ5章8～9節、ヤコブ1章17節も注目。

集会後、降誕節集会及び講演会の諸準備を行った。

